

演歌の歌

- 1, 人里はなれた山奥で、 佛のじひに救われる、 お里 沢市れいげん記。
- 2, 不治の病と知りながら浪子はボートにすがりつき、 鳴いて血を吐くホトトギス。
- 3, 宮さん来年この月を、 俺の涙でくもらせる、 熱海の海岸波のおと。
- 4, 宵の湯島の境内で、 義理に生きよか恋とろか、 おつた ちからのすすり泣き。
- 5, いきな姿の駒形が、 受けた恩義を今かえず、 見てくれおいらの土俵入り。
- 6, 無学無法の松五郎、 はかない恋に胸いため、 打つは祇園のみだれ打ち。
- 7, 何がなんでも勝つんだと、 王将坂田の意地かけて、 通天閣をあとにする。
- 8, やつときました岸壁に、 母は待ちます待ってます、 せがれの船よいつ帰る。
- 9, 恋をしてまた振られます、 寅さんぶらり一人旅、 桜なげく今に見ろ。
- 10, とともに手を取りこの町で、 明石音頭の輪をつくる、 とわに心のかようまで

やくざ渡世の歌

- 1, 人も振り向く男ぶり、 いきな糸絵の腕まくり、 いたこの伊太郎旅がらす。
- 2, 振り分け荷物に三度笠、 笠がとぶとぶ二重橋、 清水一家のけんか旅。
- 3, 三筋や糸の三味のねに、 関東かたるは鶴次郎か、 ひくはつるがの鶴八よ。
- 4, しまのかっぱに雨が降る、 行くは鯉名の銀平か、 行けば白刃の血のしぶき。
- 5, この子捨てよかすてらりよか、 人の女に身にまよう、 これが男の子もりうた。
- 6, 昔もかわらぬ筆あとで、 ごきげんさんよ達者かと、 母が涙の筆のあと。
- 7, 十七日のこの月を、 宮さん見てくれ来年の、 僕の涙でくもらせる。
- 8, やがて別れのドラが鳴る、 つらい別れの投げテープ、 さらば小島のかもめ鳥。
- 9, こよい限りの赤城山、 だれが吹くやら横笛が、 月がかなしくさえわたる。
- 10, とわに無常の風がふく、 女船頭なぜになく、 しょせんかなわぬ恋ゆえに。

全国民謡の歌

- 1, ひとり彼方の空とうく、 今も想いは主のもと、 相馬こいしやなつかしや。
- 2, 日本海の荒海を、 貝殻節でヤサホエ、 色は重なる身はやせる。
- 3, 見たか山里篠山で、 デカンショ歌えばししが出る、 さあさここ来て踊りゃんせ。
- 4, 四国徳島阿波踊り、 踊るあほうに見るあほう、 蜂須賀公もうかれ出す。
- 5, 今も聞こえる稗つきを、 那須の大八鶴富の、 鈴も泣いてる平家落ち、
- 6, むこうに見える五本松、 関はよいとこ日をうけて、 あとは切られぬ夫婦松。
- 7, 泣くな金山佐渡の里、 佐渡はいよいよか住み良いか、 草木もなびく柏崎。
- 8, やつと江差と見渡せば、 かもめ泣く声にさそわれて、 ここまで来たかと涙ぐむ
- 9, 小諸出てみりゃ浅間山、 けさも煙が三筋立つ、 あおよ泣くなよ灯は近い。
- 10, どうして忘らりよおらが国、 兵庫明石でなの高い、 たこは子午線桜鯛。

江戸双六の歌

- 1, 広い世間にただひとり、母を求めて泣く千鳥、巡礼おつるの鈴の音。
- 2, 吹くは上州つむじ風、追われ追われてどこへ行く、国定忠治の凶状旅。
- 3, 見てくれ姉さん駒形の、受けし情けの恩返し、一本刀の土俵入り。
- 4, しまの合羽に三度笠、天竜しぶきを背にうけて、伊那の勘太郎旅すがた。
- 5, 伊勢で名代は荒神山、任侠一代花とちる、吉良の仁吉の心意気。
- 6, 娘だてらに鉄火場で、もろ肌ぬいできるたんか、火ボタンお竜のあで姿。
- 7, 泣くなよしよしねんねしな、泣けばからすが又騒ぐ、名月赤城の子守雨。
- 8, やくぎ渡世の義理ゆえに、泣いてやいばを振り上げる、男くっかけ時次郎。
- 9, 小倉名代は無法松、玄界灘の風うけて、男度胸のあばれ打ち。
- 10, 利根の河原の朝つゆに、恩義のためにつゆとちる、あわれ剣客平手みき。

おっさんの歌

- 1, 人丸神社の階段に、わき水たたえる名水を、くんでうれしい亀の水。
- 2, 二人同行笠かぶり、善男善女が連れだって、明石霊場めぐりする。
- 3, 南の潮風吹いてくる、竹で形とる干しだこの、浜に揺れてる面白さ。
- 4, 嫁も好きです孫も好き、明石名物玉子焼き、食べてにっこり舌ずつみ
- 5, いつもにぎあう魚の棚、いきのよいのを自慢する、食べた魚の生きのよさ。
- 6, むこうに見えるは淡路島、大漁旗の船がゆく、明石大橋夢のはし。
- 7, 夏が来ました夏祭り、市民総出で踊ります、明石音頭の蛸おどり。
- 8, 安くてうまいが評判の、丁稚ようかんいきな味、明石土産にどうじゃいな。
- 9, こうた売ったで夜が明ける、鯛もはねますタコ踊る、ここは藤江の魚市。
- 10, 遠い昔の赤石も、今じゃ栄えあるビルの街、伸びゆく明石の晴れ姿。

赤穂浪士の歌

- 1, ひとりや二人や三人と、集まり来るは四十七士、連判状をつづる。
- 2, ふたつ心の黒兵衛が、夜逃げするとは残念な、犬侍め。
- 3, 水の流れと人の身は、あしたま待たるる宝船、大高源吾は橋の上。
- 4, 酔うた酔うたの源蔵が、徳利 枕にねていても、流す涙を誰が知る。
- 5, いきな姿の金右衛門、娘だまして絵図面を、取る手のうちやどうじゃいな
- 6, 無宿そだちの牛五郎が、興五郎に喧嘩をふきかける、するが誠の堪忍か。
- 7, 流れ流れて江戸屋敷、そば売り姿の安兵衛が、吉良の屋敷をさぐる。
- 8, 山科いでたる蔵之助、こよい別れの南部坂、胸の内あかさね。
- 9, こよい集まる四十七士、上は大石蔵之助、下は寺坂吉右衛門。
- 10, とうとう仇を討ちました、仇うったか討ちました、山鹿流なる陣太鼓。

清水一家の歌

- 1, 一人や二人や三人と、 集まり来るは男伊達、 清水一家の勢ぞろい。
- 2, 富士の高嶺と真清水に、 男みがいた男はだ、 なぜに大政国を売る。
- 3, 見れば見るほど良い男、 着流し姿にせった履き、 女泣かせの三五郎。
- 4, 死出の旅とも知らないで、 金比羅代参石松が、 えんま堂の花と散る。
- 5, いきな姿の仙右衛門、 秋葉の山の火祭りに、 仇を討って名を上げる。
- 6, 向こう見ずの鬼吉が、 けんか状を懷に、 早おけ担いでなぐり込み。
- 7, 泣いてくれるな月夜鳥、 泣けば昔を思い出す、 大瀬の半五郎良い男。
- 8, 花の長どすけんか旅、 お見せしようかこの腕を、 小政得意のいあい抜き。
- 9, ここは名おう東海増道、 富士のお山を背に受けて、 男次郎長の晴姿。
- 10, とうとう来ました追分に、 石松仇の都鳥、 討つは清水の十人衆。

中途半端の歌

- 1, いかほのお山のわらびがり、 波さん貴女はなぜ死んだ、 泣いて血をはくほととぎす
- 2, 船のデッキで月を見て、 なぜかしんみり思い出す、 あの娘が泣いてるあの波止場
- 3, 佐渡は四十九里 波の上、 たらいにのったお光坊が、 恋しい吾作のもとに行く。
- 4, 酔うた酔うたの源蔵が
- 5, この子捨てよか捨てりよか
- 6,
- 7, 泣いているのを知らぬげに、 窓は二人を遠くする、 哀愁列車よどこへ行く。
- 8 やって来いともいはぬのに 黙ってあとからついてきた 明日の飯さえなかつたな
- 9, これこれ石の地藏さま、 西へ行くのはどっちかえへ、 黙っていてはわからない
- 10, とんびがくると輪をかいた、 ここから東京が見えるかえ、
見えたらここまで飛んで来な。